



みちづくし in 佐賀 2011 ～未来をひらく つながりの道～

九州各県から約三百四十人が参加！

九州の道守が一堂に会する「みちづくし in 佐賀」が平成23年11月2、3日に佐賀市で開催されました。2日のプログラムは、以下のとおり。

○プログラム

・平成23年11月2日（水）

【概要報告編】

項 目	内容等	出演者
オープニング	面浮立（めんぷりゅう）	日新女性の会
挨拶	主催者代表挨拶	実行委員長 山崎 昌治
	来賓挨拶	道守九州会議代表世話人 樗木 武 氏
		佐賀県知事 古川 康 氏
		佐賀市長 秀島 敏行 氏
		九州地方整備局長 中嶋 章雅 氏 (代理 道路部長 山内 正彦 氏)
基調講演	題「安全・安心を守る道」	国土地理院長 岡本 博 氏
対談	題「安全・安心を守る道」	国土地理院長 岡本 博 氏 佐賀県道路愛護協会長 横尾 俊彦 氏 (佐賀県多久市長)
「道」の絵コンテスト 表彰式	道守佐賀会議で募集した 「道」の絵の表彰式	受賞者（小学生～大人）13名 審査員 佐賀女子短期大学 学長 山田 直行 氏
パネル・フロア ディスカッション	テーマ「未来をひらく つながりの道」	・コーディネーター 川上 義幸 氏（佐賀大学監事） ・フロアコーディネーター 三原 ユキ江（道守佐賀会議） ・パネラー 山田 三代子 氏（道守ふくおか会議） 日隈 諒 氏（道守佐賀会議） 宮田 隆 氏（道守長崎会議） 岡田 敏代 氏（道守くまもと会議） 古庄 京子 氏（道守大分会議） 新名 典忠 氏（道守みやざき会議） 神田橋 万聖 氏（道守かごしま会議）
大会宣言		副実行委員長 福山 貞子

挨拶

- ・主催者代表挨拶 実行委員長 山崎 昌治
- ・来賓挨拶 道守九州会議代表世話人 樗木 武 氏
佐賀県知事 古川 康 氏
佐賀市長 秀島 敏行 氏
九州地方整備局長 中嶋 章雅 氏
(代理 道路部長 山内 正彦 氏)



挨拶 実行委員長 山崎 昌治 (要旨)

「みちづくし in 佐賀 2011」を開催するにあたり、一言、ご挨拶申し上げます。本日は、ご多忙中のところ、また遠方よりたくさんの方々がご参加いただき、誠にありがとうございます。さて、今回は交流会のテーマとして「未来をひらくつながりの道」を選ばせていただきました。これは、道路はつながるだけの道ではなく、道守活動を通して次世代を担う若者たちに人付き合いの大切さや、思いやりの心、豊かな心を育て、きれいで・安全で・安心して通れる道にしていきたいという気持ちで選ばせていただきました。

最後になりますが、本日は活発な意見交換をいただき、この交流会が未来の道守活動につながるよう祈念し、私の挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。



挨拶 道守九州会議代表世話人 樗木 武 氏 (要旨)

昨年、福岡で交流会を開催してから1年ぶりに佐賀で開催することになりました。この間、それぞれの地でお互い集り、あるいは地域の方々と一緒に、皆様方に道守活動を行っていただき、大変な努力があったと思います。敬意を表します。

昨年の大会の時に、その前の年に口蹄疫の問題があって大変な時代をようやく乗り越えて、“ほっと”したことを申し上げ、今年は、大丈夫だ、大丈夫だと申し上げ、お話をしたと思います。今年も、想定外と言う思わぬ災害にあって苦しんでおります。1月に新燃岳の噴火、3月に地震、そして台風と言うように大変な苦労がこの道守活動にも強いられたと思います。それにも関わらず、皆様はそれぞれの地域の為に、みんなの為に、訪れる人の為に言うことでご努力をいただいた訳であります。今になれば、これを逆手に取る、そう言う考え方もあると思います。つまり苦しい時程、私どもは心が通じ合うことができ、絆を深めることが出来ます。或いは、試練に耐えたからこそ安全、安心の町や村を作り運営することに深い楽しみがでてくる訳です。そう言う状況下で我々は平常時と異常時と普通は使い分けるかもしれませんが、これは表裏のもので、普段から皆さん方のような道守活動でそれぞれが心を通わせておけば、異常時にも十分、役に立ちます。その意味では、入り口に書いてありましたけど、がんばれ東北、或いはがんばれ日本、その中でより一層がんばれ道守と言うことを申し上げさせていただきたいと思います。そう言いながらも最近、サッカーのなでしこジャパンだとか、ソフトバンクのがんばりだとかがあり、悪いことだけじゃないと思います。その中でこの道守会員も一時、減りかけましたが、それを挽回しまして、最近では増え続けております。9月現在で55,344人の方が登録いただいて活動しております、皆さん同士で楽しい活動をされています。一層がんばっていただければと思います。

最後になりますけども、今年の道守大会は佐賀にお願いいたしまして、実行委員会を立ち上げていただいて応援をいただきました。心より御礼を申し上げます。お陰様で道守大会は、各県持ち回りで行っていきまして、それに道守九州会議があり、8の組織で行っていきますから一巡する形になりました。その一巡の締め括りの大会がこの大会です。折しも九州駅伝大会は8つのステージ、8つの県が競っていますけども、この88に並ぶ、私どもの道守もこれまでの8年を納める佐賀大会の中で、その意味で次の8年に向けてより一層の活動を展開したい。そして先ほどご案内がありましたように「未来をひらくつながりの道」であるということを誓いながら挨拶にかえさせていただきます。



挨拶 佐賀県知事 古川 康 氏（要旨）

みちづくしin佐賀、九州各地の道守の皆様がこうしてお集まりに
対して地元の知事として心から感謝を申し上げます。佐賀市では今
日からバルーンフェスタが始まっています。先ほどDVDが紹介され
たと思いますが、唐津では今日の夕方から唐津くんちが始ま
りまして、私も生まれてから10歳まで唐津に住んでいまして、小
さいころから山を引いていたものですから、この頃になりますと何
だか気持ちがそわそわして落ち着かないですけども、バルーンと言
い、唐津くんちと言い一番良い時に皆様方に来て頂いて本当にうれ
しく思っています。



昨日のことでありますけれど、上海と佐賀空港の間に定期便を周航させましようと言う
ことで調印を行いました。来年1月18日からまずは週2便と言うことで、上海と佐賀空
港の間を結ぶことになりました。本当に地点と地点、地域と地域が結ばれるようになると
言うのは、色んな意味で夢を与えてくれると思います。飛行機はどうしても遠い所を線で
結ぶ訳でありますけれど、道路の場合はほとんどが無料なんです。道路が新しく出来るこ
とによって地域が世の中がどれだけ変わるか私も知っていますし、皆さんも良くご存じだ
と思います。しかしながら、道路を作って終わりではありません。それをどう生かすか、
私達にも問われていますし、それをうまく生かしきれてこそ地域の発展があるものと思っ
ています。これは昔も今も、ローマ時代から今日に至るまで変わるところがありません。
佐賀には貫通道路と言われる道路があります。佐賀市を東西に横断した道路が満州事変の
頃の昭和6年に出来ております。そのころにどんな名前にしようかと言うことで当時名前
を公募しました。私は意外と思いました。戦前に道路を作るのに国道何号線はともかく愛
称を募集したということが非常に民主的で意外でした。公募して沢山の応募があったよう
で、付けた名前が貫通道路と言い、佐賀市を貫通している道路です。このそっけなさが渋
くて良いです。貫通道路の一部は、銀杏（いちょう）通りと言う素敵な名前になっていま
すけど、どうも呼ぶ人がいなくて、今も貫通道路として呼ばれているようです。その貫通
道路を作ろうとした時に元々、地元は大体幅員18m位の道路で話を進めていたようで
すけども、当時の土木局の課長さんからは、そんな小さな道路ではいけないと怒られていま
す。100年先を考えなさいと、こう言う土木の仕事は未来の為にいきます。それを考え
たら30mにしましょう。事業というのは、お金が無いので、国にもって行くと小さくなる
方向にはなりますけど、なかなか大きくなれないです。ところが当時は18mで話をした
ものを30mにしましょうと言われて、昔も今も地方のお金の無さは変わらなくて、そう言
った有り難いお言葉をいただきながらも、これは県施工の事業でしたものですから、なか
なか地元負担金が出来きませんと言うことで、結局は18mの道路になった訳です。30m
にしなければいけないと言う話は、その後、昭和40年代になってこの貫通道路が交通
量がオーバーになって、ようやく別に北部バイパスを作らなくてはいけないと言うこと
でようやく実現しました。やはり当時の方の先を見る目の確かさを改めて思いますし、今を生
きるこういう道路を整備とする社会資本整備というものは未来に向けてやっているんだと
思っておかなければならないと思います。

おかげ様でその道路整備も随分進んでまいりました。道路を使って頂ける方々、そして
何より皆様方のように道路を深く理解し守って頂ける方がいらっしゃれば、これからも道
路の大事さを多くの方々に分かって頂けると思います。我々もしっかりと引き続き、必要
な道路について整備して行きたいと思っております。この道路の整備というのは、私ども
だけでは、到底、出来るものではありません。国の力、なにより地権者、地域の方々のご
理解を得て進めていかなければなりません。皆様方に大きく期待していることを申し上げ
まして私のご挨拶にさせていただきます。本当によくお越しいただきました。

トピックス



この交流会の司会は、
西九州大学3年 大曲 希実さん
〃 松永 佳那さん
に務めていただきました。



挨拶 佐賀市長 秀島 敏行 氏（要旨）

ようこそ葉隠れの里、佐賀県へおいでいただきました。皆様におかれましては日ごろから各地の土地で道路の愛を広く普及して地域の道が単なる道ではなく潤いのある道、そんな道作りに色々な面で貢献されていることに対しまして敬意を表したいと思います。佐賀市でも100団体を超過していると聞いています。私も朝バスで出勤しておりますが、佐賀女子短期大学の近くのバスから乗るのですが、毎週、通勤途中で、ある先生がゴミ袋を持って火鉢を持ってゴミを拾われているそうです。拾っても、拾っても、また誰かが捨てる訳ですが、そう温かい心が佐賀市にはあります。ある所では、婦人会の皆様が一斉に掃除をすとか、花を植えるとかして道の美しさが保たれているのではないかと思います。私が目に届かない所でも沢山の人がそういう活動をされているということで、皆さん達と同じように誇っていいと思います。

佐賀市内は恵比須さんの数が800を超え、日本一という認定をもらっています。恵比須さんが鎮座をされていると、ただ鎮座をされているのではなくて場所によっては毎朝、花と水が供えられ、恵比須さんだけではなくて通りも綺麗にしています。こういうことは大事に残していかなければなりません。道路を使うもの人間としての心を忘れてはいけないと思います。そういう心を養っているのは今日お集まりの道守の方々ではないかと思います。こういう運動がどんどん広がって、そして地域の絆が高まり、期待して、またお願いして、ご挨拶にかえさせていただきます。最後になりますが、バルーン大会今日から5日間あります。アジアで一番大きい大会です。ただこのバルーンは、いつでも見られるかというとそうではありません。天候に左右されます。天気が良くても風が強いと飛ばない、そう言うものです。皆さん達は日頃の心がけが非常に良いので明日、見ることができると思います。そういうことを期待いたしまして歓迎の挨拶にさせていただきます。



挨拶 九州地方整備局長 中嶋 章雅 氏（要旨）

（代理 道路部長 山内 正彦 氏）

本来、私どもの整備局長中嶋が伺ってご挨拶をさせて頂く予定で御座いましたが、他の公務によりこちらに参ることは出来ません。お詫びを申し上げます。局長の挨拶を預かっておりますので、私から代読させて頂きたいと存じます。

みちづくしin佐賀2011に今年も約300名以上の方の参加で会場も満席状態ですが、熱気溢れる意見交換会がなされるものと期待し、今回の開催を心からお祝いを申し上げます。本日、満席のお客様におかれましては、日頃より道路に関するボランティア活動や、道に関する様々な活動に対しまして御礼を申し上げます。またこの交流会を開催するにあたって、山崎委員長をはじめとする実行委員会の皆様、道守会議の世話人、準備に携っていただいた各県会議の方々に敬意、感謝を申し上げます。このみちづくしの交流会が待ち遠しいとか、楽しみにしているといった声を道守の方々から聞いております。今年で8回目ということですが、会を重ねるごとに皆様に定着し楽しみにしていただけたことは、誠に喜ばしい限りです。今回は平成16年度に熊本からスタートし、九州を一巡し、本日が締めめの会となりますが、今後も会が継続され皆様が築かれた会が益々大きく広がることを期待しております。今回のみちづくしは、未来をひらくつながりの道をテーマにパネル・フロアディスカッションをされるということであります。皆様がそれぞれ活動する上で、色々な問題、課題もあるものと思われませんが、まさしくこの場で意見交換や情報共有をしていただけると共に、道守の輪が未来へ繋がる活発な議論をしていただきたいと思います。私ども九州地方整備局は、これからも今まで以上に道守会員と協働で未来をひらくつながりの道を広げて行く所存であります。最後になりますが、お集まりの皆様方のご健康とご活躍をお祈りして私の挨拶とさせていただきます。



基調講演

- ・講師 国土地理院長 岡本 博 氏
- ・題「安全・安心を守る道」
- ・講演内容（要旨）

ご無沙汰しております。今は国土地理院の岡本です。今日は、安全・安心を守る道ということで地震の話からさせて頂こうと思っております。会場外にパネルを沢山並べていたかと思いますが、地震というものは一体何だったのか、その中で道はどういう役割を果たしたのか、といったことをお話をさせて頂きたいと思えます。まず、十分御承知だと思えますが、東日本大震災が3月11日、14時46分に発生致しました。実はその時だけでは無く、余震だけでもマグニチュード7.4、7.5といったかなり大きな地震が次々と起こっております。最初の地震というのは、マグニチュード9.0ということで、日本の近くで観測されたものでは始めてで、まさに想定外のことでした。震源地は三陸沖、震度が宮城県栗原市という所では震度7を観測されております。

大きかったのが津波であります。相馬、都、大船渡で最大9m以上となっております、何故、「以上」かと申しますと、観測機器は壊れて計れなかったというぐらい凄いものだった訳です。被害の状況としては、死者・行方不明者が2万人弱です。この三陸地方は、津波が度々来ておまして、昭和三陸津波1933年、死者1522人、あるいは明治三陸津波1896年ですが、2万1千909人の死者を出しております。世界を見ますとマグニチュード9.0といったものそんなに無い訳ではなく、例えばチリやアリューシャン地震、カムチャツカ地震、スマトラ沖地震、これは2004年



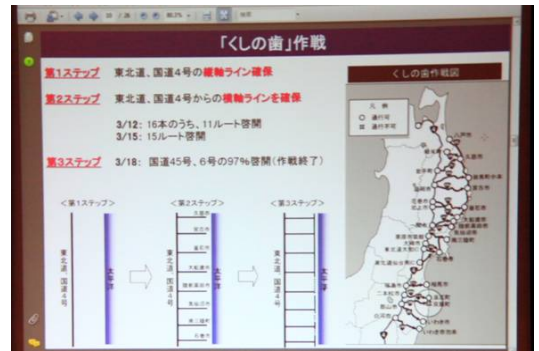
ですけれどもスマトラ沖地震ではマグニチュード9.0というものも発生している訳です。世界の歴史で言うと4番目の大きな地震となったとうことであります。この地震というのは何故起こるのか、世界の地震の絵を見てみますと、起きる所が決まっています。地球の上がプレートと言われてまして、何枚かの板が浮いていまして、真ん中に核があってマントルがあってその上にプレートが浮いて乗っている状態にあります。中が一番熱いものですから、マントルの中で熱を冷やすために対流をしている訳で、やかんの中でお湯を沸かすと水がくるくると回ります。それと同じでクルクル回って太平洋のこの辺から上に吹き出して、こちら側の日本の方にそれが沈みこんで行くというように地球が繰り返している訳であります。繰り返している中で何が起こるかということ、東北がこの辺にありまして北米プレートの上に乗っているのですが、太平洋プレートは移動します、北米プレートは停止して密



着していますから押されて縮んで曲げられていてそれがたまっていくと、ある日突然滑って跳ねてしまう、それで何が起こるかということ、跳ねた部分のボリュームがもの凄く大きい。もの凄く大きかったものから、ここで、もの凄く大きな津波が発生した。これが東北に押し寄せてきたということが今回の地震と津波であった訳であります。先ほどは滑ると言いましたけれど、海の中で最大24m滑ったのではないかと、南北450kmに渡って滑りが発生したのではないかとというのが、陸上のGPSの観測装置がありまして、それを観測していきますと推定されます。上にあがる所と下にさがる所があると申しましたけれども、日本列島に近い所が下がってしまっていてこの辺が三陸沖ですけれど、北に下ってしまったということでもあります。ここが下がった所で、ここが跳ねましたから日本列島自体が縮こまったものが跳ねて東に横移動しました、そういうことが起こりました。その結果ですけれども一番大きく東に動いた所が5.3m、下にさがった所は1.2m下がりました。地震が発生しますと、緊急地震速報がありますけれども、あれが一番最初に初期微動という速く伝わる地震波があり、動きは大きくないのですが、速く伝わる地震波が

走って来ます。その後、本当の地震動が動いて来る訳です。最終的には東北、三陸側が沈んで他の所は一度浮き上がり、大体落ち着いて来ている。それでも東京まで動きまして、東京に日本の緯度経度の原点というのがあります。ロシア大使館の横に、麻布にありまして、そこは27cm東側に動きました、24mm下にさがりました。東京でもそういうことが起きました。最終的には1m14cm下にさがってしまった。そのようなことが実際に起きた訳で御座いまして、その結果、津波の話でいいますと、たとえば陸前高田といった所では、家があった所が無くなっている、橋が津波に押し流されて、上流の方へもっていかれたということが起こった訳であります。国土地理院のホームページで見て頂くことができますので、是非見て頂ければと思います。

「くしの歯」作戦という言葉は何度も聞いたと思いますが、東北地方整備局では、まず海岸沿いがやられてしまいましたから、何とかそこに救援物資を届けようと真ん中の東北道、国道4号を幹に致しまして、そこから沿岸に行く道路が16本あるわけですが、そこを徹底的に速く通れるようにしていこうという作戦を立てて、ただちに作戦を発動しました。3月12日の時点では16本の内11本が何とか海岸まで行けるようになった。15日には15本が通れるようになりました。3月18日、一週間後には国道45号、海岸沿いですが、国道6号こちら側海岸沿いですけれど、これが97%通れるようになったということでございます。掃討という言葉、普通は使われない言葉ですが、災害などで道路が通れなくなった時に通れるようにすることです。実際には津波の直後はこういう状態で何処何だか分からない、そのようなところに地元の建設業者の方と災害の時に協定を結んでいまして、その方々をお願いして一緒になって道路を広げて行く活動をしています。自衛隊と警察の方が一緒にいらしまして、作業をしながられきの中には御遺体も入っている場合も御座いまして、そういう時にどういうふうにしたらいいか相談しながら、とにかく道を広げて行くことをやった訳であります。港の中もゴミがいっぱい出まして、船が通れなくなったということで航路の掃討もやっています。また仙台空港がテレビでご覧になったと思いますが、水没して通れなくなった、飛行機が飛べなくなった、それも何とか排水して飛べるようになったということであります。国土交通省は、テックフォースという制度を持っておりまして、東北で大変な地震があった訳ですけれども、それに対して全国の国土交通省から救援に駆け付けたということでございます。またリエゾンというのがあります。



リエゾンというのは連絡係でして各県や市町村にリエゾンを派遣して今、地元で何が必要なのかを各市町村から聞き、対応を考えたということでもあります。例えば石油タンクが倒れていて漏れたということがあって、国土交通省はどうやって撤去するかということについては、省庁関係無く地元と一緒に相談して、機械を持って来たということをやってきたということでもあります。その時、道路はどうだったかという、命の避難ルートとなった釜石山田道路というのがあります。その時に実際住んでいた方々が、新しくできた三陸縦貫自動車道路の一部の区

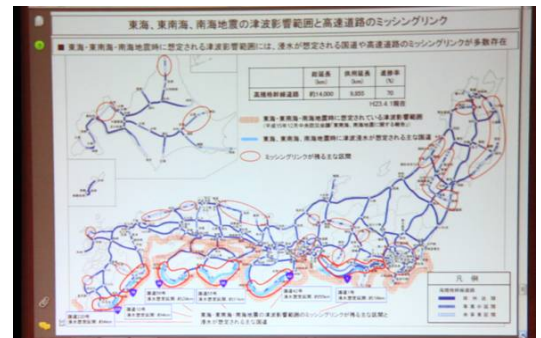
間を通して避難して何とか助かったということがあった訳です。それから避難して助かるだけではなくて、ここは盛土になっていましてテレビなどで放映してご存じだと思います。それが津波をくい止める防波堤となった。途中でBOXカルバートといって下を通れるようになっていますが、そこから水自体は少し侵入して来ましたが大きながれきは侵入していません。この高速道路を境にして被害が全く違ったといった事があった訳であります。他には小学校のそばに国道がありまして、盛土でしたが小学校から要望を頂いて階段を作って欲しいとお話があった訳です。1年前でしたか階段を作って避難訓練を行っていた訳です。まさに今回役に立って避難することが出来たということでもあります。沿岸の三陸縦貫自動車道はかなり山手で高い所にありますから波を被らずに、避難路になり、そして津波が去った後は、緊急物資を運ぶための非常に大事な道になったということでもあります。その他にも道路は阪神大震災とか、仙台宮城沖地震あるいは、新潟沖地震とかがあって、橋の補強が増えました。橋脚補強で周りを太くして補強していました。補強をしていなかった所は、震度5弱で橋が壊れてしまった、根元が壊れました。補強していた所は震度6強弱ありましたが何ともなかった、まさに緊急輸送路としてしっかり使えたというよ

うな事がありました。補強は役に立つたという事です。これからも補強を続けて行かなければならないと思います。その他に役に立つという事がありまして、インターチェンジと一体で開発された周辺施設というのがありまして、そういう所がボランティアの活動の拠点になったりしました。そして道の駅が防災の拠点として大きく活躍を致しました。自衛隊の方が救命で来る訳ですが、そのベースキャンプになり、そこで物資交換とか、トイレを使うとかしながら、救援活動に入っていたということでもあります。

日本列島は残念ながら、太平洋プレートとフィリピン沖プレートがありまして、その上に乗っていきまして、南から攻められて来て、それは熱による対流によっているものですから止まらない、摩擦で止まっている状態を耐えきれなくなって跳ねると地震が起こる。200年とか150年とか経つと必ずそういう事は起きます。避けようがない。南海トラフなど言われるものがありまして、もしそこで地震が発生したら津波が来てしまいます。そういう中ではやはり高速道路というものが確実に整備されていないと、低い所にある国道はやられてしまう。国道がやられてしまうと救援物資も送れないし、避難する事もできないという事になってしまう訳です。やはり高速道路の整備というのが未来をひらく、そして繋がるという意味でも本当に大事な物になっていると思います。

国土地理院では、地震が発生した直後の話しですが、道路が何処が通れるのか、通れないのかというのは、それぞれの道路管理者が例えば岩手県であったり、宮城県であったり、福島県であったり、そしてNEXCO東日本であったりがそれぞれ自分の所の道路がここは通れる、ここは通れないとHPに出していました。だけど例えば宮城から岩手に入っていくには何処を通過していけばいいのか、そう言う事は上手く出していなかった。国土地理院では、電子国土Webという仕組みを作っていて、それで全部の情報を集約して、道路管理者に関わらず、全部の道路管理者と組んで何処が通れないのかという事を電子的な地図の上で、HPで出すということをやらせていただきました。初めてこういう全部が繋がった訳ですけど大きいことでありました。一方で民間の方は、自動車の中で携帯で何処で走っているかと情報を送る、集めるという仕組みがある訳で、今回は、自動車メーカーが協力して、この地域でどこが通れたかという地図を公開しました。それで、災害の救援に行くというときに重要な情報であったり、今度、このどこが通れたかというのと、それから道路管理者が認識しているどこが壊れているよという情報、これとこれを統合して一つの大きな情報にして提供しているという状況であります。九州の中でもよく雨が降って通れなくという状況が有る訳です。そういったときにどうやらうまくその情報を集めて、こういう電子的な地図にして、皆さんに提供してあるいは災害救助、救援に行く人がうまく使ったりということが非常に大事でございまして、国土地理院はこういったシステムを開発して整備局にも提供して行って、市町村の方も無料で使えますのでご活用頂けますので、ご活用して頂ければありがたいかと思います。

災害というものはかならずやってきます。そのときに大事なことは自助・共助・公助だと言われています。自助は津波が来たら警報を基に自分で逃げることです。東北のある大学の先生が一生懸命、子供たちに逃げるという教育をされていたそうです。それでみんな本当に逃げて助かったそうですけれども、その時は逃げる時はとにかく誰かを待っていたらみんなダメになるから、まず逃げろと。自分が逃げろと。一人が逃げると他の人がこれはやばいんだと思って一緒について逃げてみんなが逃げるということが大事なんだという教育をされていたそうです。自分自身で逃げなきゃいけない、そして、どこに逃げればいいのかちゃんと知っているということが大事です。公助、これは高速道路をちゃんと整備するということですか、なんかあったときに自衛隊とか消防隊を派遣するとかそういった公共団体が防災力向上のためにやることがあります。もうひとつが共助がありまして、公助を待ってられないとか公助のきめ細かくやんなきゃいけないときに一人じゃなくてみんなで助け合うということが非常に大事です。足の不自由な方をちゃんと車椅子で押して避難する場所にお連れするということが出てくるんだと思います。あるいは知らない人にここに津波が来るから逃げなきゃというお互い助けあう、教えあう、この共助というものが非常に大事でありまして、道守活動をされている皆様、それぞれの団体があると思いますけれども、道路を掃除する、あるいは花を植えるということ自体も貴重なことでもありますけれども、そうやって知り合っている方、あるいは何人かが同じ活動をするをするということで、この共助の大きなきっかけになるんじゃないかということで今回の地震を踏まえて強く感じたこととさせていただきます。是非これからも皆様、しっかり共助の目を育てて頂きたいと思います。



対談

- ・講師 国土地理院長 岡本 博 氏
佐賀県道路愛護協会長 横尾 俊彦 氏
(佐賀県多久市長)
- ・題「安全・安心を守る道」
- ・講演内容 (要旨)



(横尾氏) 今、非常に優しく、分かりやすくお話をして頂きました。岡本地理院長とは九州地方整備局道路部長でご着任されたときにご縁がありましてその後、国土交通省の本省の幹部に戻られて、その後、再び九州地方整備局長としてお越しになりまして、大変親しくご指導いただいたり、飛び込みで局長に会いたいといったら、ぱっと会って頂いて、たとえば県内の道路とか、国道203号線の整備とかいろいろな所をご支援を頂いてところでありまして、本当に感謝をして今日久しぶりで有り難いなと思っております。実は九州に着任されたときに岡本さんが道守会議の生みの親だということなのですが、何かその辺で思い出とか、かみしめたものをどんな風にご覧になりましたか。



(岡本氏) 生みの親ということではないのですが、たくさん親の方がいらっしゃるのですけれども、最初に作る時に一緒にやらせていただきました。なにがきっかけだったかというと、ボランティアをされている方というのは、元々、沢山いらっしゃる訳ですけれども、あちこちで掃除をしたり、そういった方々がせっかくやって頂いているのですから、一度どういうことを思っているのか、ご意見をお伺いするっていう場所、会議を開いてですね、そうしたらこういう会議は本当に大事だと強くおっしゃって頂いて、そこで国土交通省地方整備局をそういう連絡をする場の段取りをしろというようなお話がありまして、それではということで国民の方々、何名の方と一緒にやらせて頂いた。たまに会って「やあやあ、最近どう」ということをやるとそれぞれ元気になるんですね。道路を作っている側も皆さんとお会いして、ああそんなことやってらっしゃるんですかと作る側も元気になるんです。さっきの自助・共助・公助がありましたけれども、われわれ公助の側だったんですけれども、やっぱり共助をやっている方をみると公助もちゃんとやんなきゃ、がんばんなきゃと思う元気になるということで非常に良い刺激を得るということで、そういう意味では第8回まで続いたということは大変ありがたいことであると思います。是非これからもご協力させていただきたいと思います。



(横尾氏) 8回まで続くと、続くと思いますね。8を横にすると無限という字になります。是非、無限大に続けて頂きたいと思います。お話があったように、作る側が一番ありがたい、嬉しいのは作ってできたものを良かったよとか、使い勝手が良かったよという声だと思います。わたしも市長になってわかったことなんですから、苦情は多いんですよ。でも、がんばって仕事をしてありがたいとは意外と少ないですね。誉められることは少ないなと感じております。たまに職員に頑張ったとか対応してもらってよかったとか葉書とかが来るんですけれども、拡大コピーして担当課の壁に張ってもらってますけれども。是非、皆さん、道に関してそういつて対応していただくと良いかなと思います。先ほど色々ご紹介があったのですが、くしの歯の話は私も関心しました。被災後1ヶ月、2ヶ月後に県の道路管理の予算要望の会長もしておりますし、九州ブロックの代表もしておりますので国土交通省本省の面談の機会があったのですけれども、その1ヶ月ほどの経緯をずっと見せて頂いたらほんとに1~3日の範囲で主要幹線道路の復旧をさせて頂いている。1、2週間の範囲でくしの歯を繋いで、内陸部から海岸線へ、たとえば浜巻が釜石を応援するという風な体制をちゃんと組んでして頂いていると改めてすごいと思いました。多久市には市立病院がありますので県内の公立病院の協議会の会長もしている

のですが、一番最初に震災に起こった病院の薬は大丈夫か、あるいは透析患者は大丈夫か、これについては道路が無いとものが運べない、患者の方を輸送できない、搬送できないとなり、通常ですと暮らしに必要な道、産業にかかせない道、それ以上に重要なことは命を守る道と痛切に感じているところです。院長が九州地方整備局にいらっしゃったときに有志の職員の方々とプロジェクトX風なDVDを作られましたよね。あの辺が災害が起こった直後かと思うのですが、こういったご苦労があったかご披露、追加でして頂きたいと思うのですが。

(岡本氏) 平成21年、宮崎に台風が来て、洪水というか大きな土砂崩れが起きました。9月18日に台風13号が来て、国道220号は連続雨量が170mmを超えると通行止することになっている。夜中もずっと降っていて、午前2時に見てみるとすでに崩れているということが分かった。それで夜が明けると同時にですね、測量を開始した。非常に荒っぽいですが、実際に、どういう風に壊れているか崩れているか調べている訳であります。山が崩れて海岸付近に道路があった訳ですけども全部やられて、こういう風になっていた。これをどうやって復旧していくのかということで、撤去作業を19日午前8時に開始しました。1万m³、ダンプ2000台分の土砂が崩れた訳でございまして、このとき朝9時から作業を開始してダンプに少しずつ積んでいきました。ダンプを置くのも大変でしてダンプ自体が途中でUターンできないですから、だいたい手前からバックしてきて、そこにはかなりテクニックが必要になってるんですけど、バックホウで上の方にあがってもらって危ないところを削り落とす作業を行いました。夜中に照明車をたくさん集めてきて、夜通しこういう作業をやっていたという訳です。あと崩れた土砂をどけたんですけど、また上から崩れてくるといけないので、崩れてこないように壁を作って土砂崩れを防ぐということをこれからやらないといけないということであります。現地で協定を結んで業者の方と一緒にこういう防護柵を作っていました。杭を打つために掘削機というのが必要でして、その掘削機が九州のどこにあるか探してですね、一生懸命集めて、3台目がようやく来たということで、穴を掘って支保というものを建てこんでそれで、壁を作っていく訳です。壁を作ったうえで21日、3日目の朝にここまで出来て、通れるようにしようということで最後の作業をやっている。そして、なんとか片側の1車線だけ48時間後に通れるようにした訳です。こうやって開放後も側溝にたまった土砂の掃除しました。



(横尾氏) 実際の映像はドキュメント映像として残す気は元々なくて、その場その場でスナップショットを現場で撮られたものを当時で工事でまとめられたものです。我々が最初に通る時は、通れるようになってからしか通りませんので矢板の作業とかですね、現場の声とかですね、斜面で危険極まりない状況なんではないかと、大変ありがたいなと思います。それからみると私が参加させていただいている道路のゴミ拾いなんか簡単なものだと思うかもしれませんが、でも、こちらの輪の方は本当に重要であるかと思います。私自身は道路愛護協会の会長もしていますが、この協会は全ての自治体に関係しています。都道府県別にありますし、佐賀県は10の市と10の町が一緒になって愛護協会を作って、維持管理をしようとしています。そういう形で環境整備とかをやっていく訳ですが、今日、来場されている皆さんは子供たちが元気に活躍できるようにとか、その絆を大切にしながらですね、色々な連携を地域でして頂いていますし、今日のパンフレットに記載されている道守通信ですね、見ても色々なボランティアの動きが有ります。佐賀県は大変ありがたいことに佐賀国道の事務局長さんは夫婦共々一緒になってですね、花植とか掃除とかにも参加して頂いて、ありがたいなと思いました。ただ、片方では途中で仕分け関係がありまして、弘済会とかいろんな国土交通省の予算が仕分けになりまして、皆さんも実感されているものと思いますけれども、年度を終わらないと予算が来ないという、どれくらい来るか分からないということになって現場にとっては苦労もあったかとは思っています。道守という漢字良く見ると、「みちのかみ」と書いてあるんですよ。なんかそういう思いで付けられたんですか。ただ道を守ることによってよろしいのでしょうか。

(岡本氏) 代表世話役の人がですね色々考えて頂いて、みんなの思いを一番素直に表す言葉として付けたんじゃないかと思っております。字とかロゴ、結構こだわってですね、その道守通信の表紙もずいぶんいろいろ検討して頂いて、委員の方に頑張っていたいただいた思っています。

(横尾氏) 道守というのは本当に分かりやすいなと私自身も感じているところです。先ほどは復興復旧でしたけれども、きちっと道を立派に作っていくということも重要であると思います。大変、地方財政が厳しいし国家財政も厳しいし、我々も必要な道の要望あるけれども、なかなか一気にできないという状況ありますし、現政権または前の政権のそれぞれの幹事長さんクラスとか政調会長さんにお会いすると、一番全国から要望が多いのは道の整備だと良く聞いております。ご助言いただけるとありがたいのですが。

(岡本氏) やはり財政的に厳しい中で、しっかりしたものを計画立てて、着実に作っていくということが大事なんですね。地方の予算がどんどん伸びて行ったから、色々な所に色々な計画を作っていくって始めたはいいのですが、ずっと止まっているのが沢山あります。やはりメリハリをつけていかにしっかり作っていくか。特にこれだけ厳しくなってきた後では、高速道路の非常に効果が高いものに狙いを絞ってやっていくということが非常に重要なのかなという気がします。それだけ沢山のものをこれから作っていくことは難しいと思います。どこまで意識して集中して作っていくか、もうひとつは例えば全線を歩きやすく綺麗にするとか、そういうこともあんまりお金をかけないようにしながら、きめ細かく対応していくということが大切になっていくのかなという気がします。

(横尾氏) 道路の重要性について先ほど事例が東北の例が出ていたのですがけれども、相馬市長さんは道路の会議を通じて親しくなりましたけれども、その市長さんの話によると、実は東北自動車道は盛土になっている。そこで実は津波がほぼ止まったと。ご自身は実はお医者さんで病院をお持ちなんですけれども、そこから500mぐらい離れたところにあったそうです。もし、道が無かったら全部流されていたと。そうしたらどんな事態が予想されるかという、他の病院も当然やられてしまいますので、南相馬の人が運ばれてくる相馬の病院はほぼ全滅だとか聞きました。幹線、主線となる道路の整備は非常に重要であると改めて感じます。それと同時にたまたま国土交通省の河川事務所の方ともお話をしたのですが、ここは道が大事だねという話がでたんですね。やっぱり水害が多く全面が浸かっても嵩高の道路はちゃんと残ってますので、そうするとPAとかSAにはレスキューがちゃんと作戦本部を置けるようにするとか、今のように救護とか復旧の部隊の一時仮置きにして作業にするようにするとか、場合によってヘリコプターの基地、滑走にすぐなるとか。そう言うことも含めた道路の環境整備ということも重要だなと話したことがあります。そういったこともつなぎながらやっていかなきゃいけないと思っているのです。

実際、佐賀平野を見ると津波の予想が有るのですが、今後、佐賀県の有明海津波が予想される地震はどんなものがありますかと聞きますと、詳しい方に聞くとそれは雲仙で何かあった時だと。以前の歴史を紐解くと雲仙が壊れて、島原に大量の土砂が下りてきた、それで波が起こって対岸の熊本側も水浸しになった。その時の余波が上がってきたというのがあるのらしいです。水が引いた後の復旧などの検討を是非やっていかないといけないと思います。

また、道守会議スタートの時から岡本さんも思っていたらっしゃったと思いますけど、道を綺麗に使う、維持管理を良くしていく、そういった点では国土地理院に行かれて全国をご覧になって、我々九州の参考になることはあるでしょうか。

(岡本氏) 綺麗に掃除して頂くということは本当に大事だと思うのですが、それだけではなくて、掃除をやっている、あるいは掃除をやっている人が知り合いだとゴミ捨てが無くなりますよね。やっぱりゴミすてちゃ駄目だと気持ちが伝わっていくということが本本当に大事なことなんでしょうと私は前から思っております。地理院の方で言うと道守もやって頂いているのですが、通り名道案内というのをやってですね、その道路の名前を通じてその場所を表すんです。何々道路の何番地みたいな紹介・案内の仕方をしていけばいいなと前からやってたんですけど、今度、地理院に行って地図の中にそういう通りの名前と位置番号というのを電子データとして蓄積する。そして検索したら出てくるようにするというのをやろうかなと思っていまして、今ある通りをいかにうまく活用していくか、そんなことが大事になってくるんだろうなと思っております。

(横尾氏) 情報を使ってどんどん協力をできるようにしていくというのが大事だと思います。私は実は掃除を始めるようになった理由はそもそも政経塾では野田総理もなさっておりますけれども、松下幸之助さんが塾生にさせたいことというのがいくつかあるのですけれども、最初の二つは、早起きと掃除なんですね。早起きと掃除は幸之助さんの弁によると、志が無いとできないそうです。早起き、簡単じゃんというけど、違うんですよ。明日から起きようとか、来週の月曜日からとなるんですよね。その次が6時に起きて6時30分から掃除をやるんですけど、掃除もですねイヤイヤやっている掃除の姿と、ちゃんと身が入っているのは一目瞭然で分かるそうです。腰の入り方が違う。ほうきさばきが違う。これに詳しい方は鍵山秀三郎さん。イエローハットの創業者ですけれども、日本を美しくする会、掃除の会を引っ張って、この方が来られたんですね。何分の一は身が入っていない、一目で見分けられた訳ですよ。それから気合が入ってご指導ありました。それをきっかけに私も色々してたんですが、実は、選挙の時も掃除で選挙してたんですよ。まず、街宣車に乗るときはちゃんと掃除していく。ミニ集会をやる時はまず、掃除部隊が行ってまず綺麗にして話をして、綺麗にふきあげて帰っていく。借りる前により綺麗にするとか、話す前より綺麗にするとしたら、不思議なことにだんだん快感になったらしくて、最初はそんなやってる暇無いんじゃないかと話だったんですけども、身が入ってきました。その思いが有りましたので実は市長就任の時は朝掃除をして登庁しました。実際翌日も、翌々日も1週間したんです。そうしたら3日目ぐらいから市の職員に言われました。あんまり、やると掃除の方からやっかみになりますから辞めた方がいいですよと、まさしくその通りだなと。その代わり取り組み始めたのはボランティアの皆さんと一緒にゴミ拾いをしようということでやってるんですね。不思議なことにこのボランティアの日は雨が降らない。台風が来ても、雨情報があってもその時間は降らないですよ。降ったのは2〜3回しかないですね。それがずっといろいろ広がっています。岡本院長がおっしゃって頂いたように、そういう方がいらっしゃる街は確かにゴミが減っていく。あるいは友達がしているから、捨てる人がまず減っていく。これはとってもいいことだなと思います。日本を美しくする会の方がおっしゃったのは、出会ったゴミは拾いなさい、という有名な言葉が有るんですね。ゴミと出会うと誰かが拾うだろうと、普通は通り過ぎるんですけども、出会ったんだから拾ってあげなさいと。そうしたらどんなことが起こるかという、周りの人が感心して、まずあなたを誉めてくれます。全員は誉めません。恥ずかしいから。でも、感心して見ている人は多いはずなんです。そしてこういうことも大事だよなと思った人が増えて行くと、ゴミが減っていく。綺麗な街になっていく。そこに人が来るようになる。あるいはもっと言ったら、道路にしてみれば、防犯にできるし、良くなるなと思います。是非、今日、九州各県からお見えになった皆さん、多分それ以上の活動をされていると思いますので、是非そういったことをがんばってやって頂いたらいいんじゃないかなと思います。

「道」の絵コンテスト表彰式

- ・審査員 佐賀女子短期大学 学長
山田 直行 氏

- ・講評内容（要旨）

今日、受賞されたみなさん、本当におめでとうございます。皆さん、本当にすばらしい作品を出して頂いて、立派な賞を良かったなと思います。今回の道の絵コンテストに、小学校低学年の部62点、高学年の部47点、中学生の部11点、一般の部59点、計179点でございます。大変慎重に審査をさせていただきました。「あったらいいなこんな道」、「きれいな道」、「花の咲く道」、「未来の道」などというテーマを意識しながら皆さんも書かれたと思いますし、私もそういう意味で審査をさせて頂いた訳です。



まず小学校低学年の部、低学年らしい夢のあるカラフルな作品がありました。それから発想の楽しさがあります。最優秀賞の山口眞白さんは、動物道路とか、自然道路とか、魚海道路とかユニークな道をカラフルに描いていました。それから所々にお花見スポットというところを作って、動物さんがいたり、そこで遊ぶスポットがある、そういう風に低学年らしい夢のある楽しい絵になっております。妹さん、山口弥瑚さんの亀さんの道ですね。これも、大変楽しさがありました。

そして小学校の高学年、これも高学年らしい自然の見つめ方、これが良かったと思います。最優秀賞の辻田美桜さん、学校の行き帰りのことだと思うのですが、行きがけのアジサイの花に止まっていたカタツムリさん、それがまだ帰り道にも止まっていたこと。その日の雨降りの一見何気ない道すがらの出来事ですが、それを感じる心ですね、これが素晴らしい。感じる力ですね。これはすぐ表現する力にもなる。表現する力はこれは生きていく力にもなります。本当にすばらしい感性にびっくりいたしました。本当に素晴らしいなと思います。それから星空に道を見つけたりですね、サッカーボールの道、高学年らしい眼差しがありました。

次に中学生の部、作品数は少なかったんですけども、中学生らしい、これは美術部の方かもわかりませんが、普通の水彩絵具よりもちょっと発色が良くて透明感が強いポスターカラーを使い、いい表現をした志岐美晴さんですね。この作品は、ピンクと白の市松模様、ずっと奥行きのある道路が書かれていますね。そういう構成力。それから平塗の仕方、そういう技術的なものがとっても素晴らしいと思いました。

最後に一般の部ですが、道というものを捉える捉え方ですね。一人一人、人生の哲学とか生き方、そういうことを感じさせる作品が多かったです。最優秀賞の樺島永二郎さん、ちょっと写りがあまりよく無かったのですが、本物はものすごく良かったのですね。赤と黒の二色で簡潔に表現されて、圧倒的に強い作品でした。そして「今日是一緒に帰ろうか」という文字が入っていました。一日の仕事を終えて帰る親子の姿ですね。家族の温かさを感じさせる素晴らしい作品に思いました。さすがに一般の部はですね。その人その人の豊かな人生観を感じさせる作品ばかりで私も勉強させていただきました。

皆さん、本当に心からおめでとうございますと申し上げまして、私の審査講評とさせていただきます。

※ 「道」の絵コンテストの各優秀賞には、佐賀国道事務所のホームページで公開しています。

http://www.qsr.mlit.go.jp/sakoku/activity/michimori/road_e.html



パネル・フロアディスカッション

- ・コーディネーター 川上 義幸 氏
- ・フロアコーディネーター 三原 ユキ江 氏
- ・パネラー
 - 道守ふくおか会議 山田 三代子 氏
 - 道守佐賀会議 日隈 諒 氏
 - 道守長崎会議 宮田 隆 氏
 - 道守くまもと会議 岡田 敏代 氏
 - 道守大分会議 古庄 京子 氏
 - 道守みやざき会議 新名 典忠 氏
 - 道守かごしま会議 神田橋 万聖 氏
- ・題「未来をひらく つながりの道」
- ・ディスカッション内容（要旨）
（川上氏）

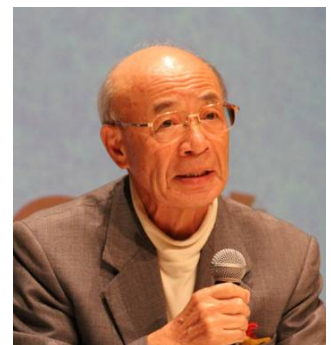


皆さんこんにちは。先ほどの岡本院長と建設省で同期入省なんですけど、岡本さんは道で私は川に進みました。道守会議のコーディネーター役を引き受けて思ったのですが、九州でこういう会議を二十数年前に河川シンポジウムというのをやりました。これは地域で一生懸命、地域づくりとか町おこしやられている方と川をどうするかという、そこを接点にいろいろやりました。多分この中に活動された方おられるかもしれませんが、当時は、行政が丸抱えしてたんですね。人も物も、全て支援していました。民間で活動されていた方に参加頂いて、一緒になって川をどうするか、地域をどうするかという議論をしました。私の方にお話が有った時にはですね、一般の会長さんが依頼に来られたんですね。非常になんか変わったなと感じました。思い起こせば、行政も変わりました。そしてもうひとつ、地域の方たちもですね、平成10年にNPO法ができて、地域の方が活用しやすい仕組みができて、お互いが進化したというか分かりませんが、いい関係になってきているんだろうと思っています。私はもう少し社会を経済を通じて、経済至上主義じゃなくてもっと色々な価値観で地域の色々なことをやっていこうかという言葉が出て、震災を機会に変わろうという話が有ったかと思うんですね。ちょっと若干風化しているような気がしないでもないのですが、この道守の会も、ある面では社会実験をやられてきたわけですけども、ちょうど佐賀で一巡しますんで、第二ステージに色々進化させて、本当の意味で地域が豊かになる、豊かになるというのが経済だけではなくて、心が豊かになるような試みを多分皆さん方の役割もあるんじゃないかと、そんな思いが有ります。これからそれぞれの各県で活躍されている皆さんに、ご紹介を頂いて、そして会場の方々ももっと色々ないいことやっているよという話があれば、話を伺ったりして、今日の最終的なテーマ「未来をひらくつながりの道」という夢のある提案だとか色々な提案を承って、閉会宣言につなげていこうかと思います。それでは、お話を伺って行きたいと思います。それでは長崎県の方からよろしくお願いいたします。



（宮田氏）

今日、嬉しかったのはまさしく、この題にあります。「未来をひらくつながりの道」という、この企画をやられた佐賀の道守の会議はすごいことをやられたなど。先ほどの子供たち、あるいは一般の大人たち、こういう企画は長崎は思いつきませんでした。そういう面ではさすが佐賀は大隈重信以下、人づくりの町だなと、改めて敬意を称します。関係者の皆さんありがとうございました。もうひとつ嬉しかったのは、岡本院長が東日本の震災の話から入ってきたこと、安全安心を守るんです。私こういう題材はあんまり気に入りません。本当は、安全安心を作る道といった方が私は良いんじゃないかと思っております。長崎では20年前に雲仙が200年ぶりに爆発しました。恩返しをしようとして市民より募りまして、20名、バスで1,800km、20時間で南三陸町に行って参りました。ふたつありまして、一つは友達のいわき市の画家が亡くなりました。流されました。銀座でいつも展示をやっている友達が亡く



なりました。それともう一つは、テレビを見まして、長崎の原爆と重なりました。私も5歳で受けましたが。そういう面ではあれは見ておれん、現場主義ということで古希を過ぎてみんなと一緒にいったんです。三陸町の中学校から見下ろすその姿はまさに、壮絶でした。道だけが生きてるんじゃないんです。道も死んでいるんです。人がいない。車も通らない。しかし今日はお話聞いて分かりましたけれども、道だけさっとできてですね、海から山まで約3kmございますが、それだけがダッーとひらき、今日、国交省と自衛隊のご苦勞が分かりました。ああいうものを本当にきっちとやっている。しかし、そこに通る人がいない。車がない、これは壮絶ですよ。やはり道とはなんだと、つくづく考えました。今日もお話出ました、命の道、自分たちで作る道、そしてそういうものをどうやって維持するか、そういうことをつくづく考えまして、道のありがたみ、道の重さというものを感しました。それからもう一つは、司会が言われました、やはり、日本が変わるんだと、日本人らしい日本人の有り様、もてなしという綺麗な心、自然を大事にする、そういうものをやはり震災が教えてくれた。命の道をどうやって守る、よりむしろ作ることに我々道守活動がどうやって参画してそういうことをつくづく考えた。提言はまた後ほどの時間でお話したいと思います。

(日隈氏)

佐賀大学経済学部の日隈といいます。大人の中にこうやって壇上に上がってしゃべるのが慣れていなく、かなり緊張します。僕は大学生の団体で、佐賀市の商店街に大学のサテライト施設というのが有りまして、そこを拠点に活動しています。そして、活動理念として、若者と町をつなぐ懸け橋となる団体というのを理念にしています。大学生は商店街に来ることが少ないです。大学からは自転車で10分もかからない距離なんですけれども、それより郊外の20分30分かかるユメタウン、モラージュに足を運ぶことが多いです。なんでかなと思って聞いてみると、大学生は口々に商店街には何もないといいます。でも、僕たちは商店街で活動していて、その商店街のお店の人たちやお店の商品など魅力的なものを沢山知っています。そういうものを知らないのはとてももったいないなと。でも、だれかが大学生に教えなければ、商店街に大学生が来ることは無いなと思っています。では、僕たちがそれを知らせる活動をしていけばいいと思い、活動しています。それで主な活動としてはまず、商店街の情報やイベントなど外部に発信するためのフリーペーパーである、「街中かわら版」というものと、また小中学生を対象にした塾である寺子屋バルーンというものを運営しています。これによって、将来を担う子供たちを若者自らが育てる、そして、子供たちが若者が商店街に入ってくるきっかけを作る。また、かわら版フリーペーパーを通して、町の人と若者、地域の方々がつながる活動をしていきたいと思います。今回のテーマで未来をひらくつながりの道ということで、直接、道路ということではないんですけれど、道というものができるには人が存在して、またその土地に愛着があり、より良くしていきたいと思うからこそ、道を作っていくんだと僕は思います。そういう意味で、僕たちはこれから自分たちの町に愛着を持つような、また持ってもらえるような活動をしてきたいと思います。今日は、唯一若者ということで大学生からの視点で意見を言えたらと思っています。



(岡田氏)

熊本県は今年の3月12日、くしくも大震災の翌日ですが、九州新幹線の全線開業という日を迎えまして、それまでに熊本でいろいろな活動をしておりまして。道守熊本は花いっぱいでおもてなし活動というのを中心とやっておりまして、それを九州全線開業にむけて新幹線の駅が県内に4つできますので、そこでも花いっぱい活動を行って、皆さんをお迎えしようとおもてなししようということをやってきました。熊本駅と新玉名駅は新しくできる駅です。そのなかで新玉名駅の方にはその地域で野草の会というのがあります。新玉名駅で野草で料理をして皆さんをおもてなしをしようということで、大変評判になっているグループがありますが、そのメンバーが地域づくりのメンバーでありますので、その団体をお願いして、玉名駅をきれいに花いっぱい、またイベントもして頂きました。熊本駅は熊本にいらっしゃる中心の方たちが一生懸命、水道町とか、色々な所で花をたくさん植えてもてなしをいらっしゃいました。そしてまた、ありがたいことに熊本駅では「おもてやん」というのが熊本の美人の代名詞なんですけど、おもてやんは誰でもできませんので、また、人を介しての色々な紹介というの、熊本では盛んにやっています。それと、新八代駅と新水俣駅は部分開業の時にやって



いましたので、二つの駅は花いっぱい運動をさせて頂きました。その新幹線開業に向けて、やはりお客様を迎えると同時に、今までのローカル線は本当に地域を命をつないでいる道、鉄道なんですね。国道といっしょに色々な道と一緒に鉄道も大事な道だと思いますので、その道を日々365日ですが守らせて、色々な地域の方と触れ合いながら、肥薩おれんじ鉄道というローカル線を守らせて頂いております。東北大震災のお話が有りましたが、第三セクターの三陸鉄道が大変な被害にあいまして、今、復旧できるかどうかという瀬戸際に立っております。そこにも、ご縁が有りましたので9月1日から5日間、三陸鉄道方面をずっと回って参りまして、私たちができる支援活動は何でしょうかとお伺いしたところ、やはり、鉄道が寸断されて地域の方が困っているけど、やはり、鉄道会社じゃなくなると地域の生活も守れなくなるから、会社が存続できるように会社で作っているグッズを是非九州でも販売して欲しいということでしたので、私どもは肥薩おれんじ鉄道の八代駅で販売させて頂いております。そしてこの前、熊本の中心街でも3日間、販売と支援を訴えかけてまいりました。

(神田橋氏)

鹿屋は鹿児島県の大隅半島のちょうど真ん中のあたりにある町。昔は海軍の航空隊があり、今は海上自衛隊が有名であります。バラの町でいま売り出し中でございます。平成15年2月にこのバラを基本として国道を皆さんに気持ち良く運転してもらうということに、バラ通り220、220というのは国道220号線にちなんでいる名前でございます。そういう意味で、平成15年2月にスタートいたしました。その年の4月から私が町内会長をやっていることで4月からこの3月まで8年間、その任を務めて参り、4月以降交替をしております。このバラ通り220というのは町内会を始め、老人会、さくら会という名前にしておりますけれども、その他自動車学校や九州電力鹿屋営業所、あるいはガソリンスタンドなどの団体が協力して、年間7回にわたってそれぞれ分担して手入れをいたしております。町内会としてはそのうち3回に関係しております。年に1回はそれぞれの会員が出てボランティア活動をやりたいということで、3回のうち最初はどこの班とどこの班だよ、年に1回はみんな出ましよう、ということで計画をして、やってきております。町内会の中にはですね、夫婦連れ、あるいは子どもさんも連れて一緒に草取りに励む、小さい子供さんはできることを、草をあつめて運ぶとかですね、そういう姿が見られますし、中には、単身赴任で山口のあたりに行っておられて、たまたま日曜日帰ってきておられて、その活動に参加して下さる方もあります。お年寄りのグランドゴルフはどこも盛んでありますけれども日曜日はグランドゴルフの大会で、どうしてもでられないと、前日の午後、奥さんと二人で、あるひと区画を草をとり、袋いっぱいためて、そして責任を果たして下さる方もあります。また道路沿いの企業の方で町内会の人たちが一生懸命やっている姿を見ておられる訳ですから、ある企業は週に1回、近辺の道路とか清掃する日を決めていて、協力して下さって、その前はいつもきれいで、私たちはそこはもう素通りできるくらいのそういう協力者も現れています。しかし、なかなかそれが広がりを見せずにもう少しという気もある訳ですけどもね。それから、町内会は大体、過去3年間をみても59%位の参加率になっているようです。それから意識ですね。会員の方々のこのボランティア活動に対する意識。例えば参加して他の班の方々とも顔見知りになり皆で除草をして美しくなるのが楽しい、唯一、町内会と感じられるひと時です、というようなアンケート調査を毎年やっておりますが、わりと好意的にみんな受け取っていただいておりますけども、なかなか、最近では出席される方が固定化してきていると思います。そういったものがこれからの課題ではないかと考えている次第でございます。



(新名氏)

道守活動も8年目になると思います。私は宮崎会議の世話人三代目でございます。宮崎から4時間かけて、高速道路で駆けつけて参りました。宮崎会議は道守活動は10月を道守月間と定めまして、そのうち第4日曜日を道守の日と宮崎会議の日と定めまして、県内三ブロックで活動を行っております。今日の交流集会の場で、パネルが展示されていると思いますので活動内容についてはそちらの方で見て頂きたいと思います。それぞれの地区についての活動については、テーマ、課題が色々ある訳ですので、たとえば観光地でもてなしの美化活動とか生活道路での清掃・ゴミ拾い活動、あるいは歴史街道を訪ねて、ふるさとづくりとか郷土愛の活動とかそれぞれのテーマ、地区地区に違うのですが、各事務所のバックアップのもとにですね、それぞれ熱心に活動されています。もちろん、年一回になって地区地区の事情によって、2回あるいは数回やっておるというのが、活動

の実態上でございます。地域の人々のつながりを把握したうえでの、ひとつとしての道守活動と、そういう位置付けかなと思っております。道守活動という名で改まって、道路清掃とか植栽活動するというのはなくて、それぞれの地域が必要に応じてやっている活動、それが道守活動という風に位置付けてやっているというのが実情じゃないかなと思っております。そして、活動自体を国交省さんなんかとそれぞれの事務所さんが盛んに広報活動をやっているという状況です。街中でパネルをやったりとか、あるいはインターネットで発信したり。そういったことが、道守活動自身のモチベーションを上げるというか、そういうことにもなっているかなと。また、こういった九州会議でそれぞれの県の事例を聞きながら、ああ、こういった地域がこういうことをやっている、うちもこういうことをやってもいいよねというような形でつながっていくのかなと思っております。今回のテーマで未来をひらくという、道守活動で課題というのはやっぱり、人材というか高齢化というか固定化とか色々あります。そして財源でございます。私どもは社会実験ということで独自に、国庫負担というサポートシステムということで社会実験をさせて頂きまして、今年の秋の10月でしたけど植栽活動のなかで試行という形で来年3月までの形で、宮崎市メインストリートの橋通りに42基の花壇を広告というか、広告というばかりでなく、協賛と意味でのそういった、業者さんのサポートシステムを行っているところでございます。今回試行という形でやりまして、その結果を実証しながら来年4月からいよいよ本格的な始動につなげていきたいかなと思っております。そういった意味でその過程におきまして、当然国交省さんのご理解なり、あるいは警察、県道路維持課、市の景観課関係の行政の連絡協議会等で検討しながらあせらず確実な歩みを続けてきたところでございまして、ようやく今回42基が設置されたということでございます。これにいたるまでに、国交省さんのご理解を頂いたということは、私どもが8年続いてきた道守活動の実績といいますか、その上に立っているのかなと思っております。ですから、道守のそれぞれのつながりとともに、制度システムの継続つなげていきたいということで、人のつながり絆の輪を広げていきたいなと思っております。



(古庄氏)

大分の竹田というところからまいりました。私たちのところは熊本県の県境に位置しております。何をしても鉄道ができるのも道路ができるのもいつも取り残されているようなところなんです。他の県さんとちょっと違ってそのような地形のところですから、まず、自分たちの生活の糧である道を早く作ってくれって言うところから入りまして、要請活動とか一生懸命してたんですけど、途中でそんな中でも学習会を重ねて行く中に、やっぱり道づくりは人づくり、人づくりは道づくりと気づいて、これじゃいけないとなってそういった中で道守会議というのに出会いました。そういった中で私たちは他の団体の方とささやかな行動をしながら、道路の草取りや道に花を植えたりした活動をして、楽しんでいました。最近、地域の子供たちが私たちの後姿をみて、率先して私たちの自分たちの道は自分たちで守らなくちゃいけないと事を感じてくれていまして、ポスターというかパネルを作りながら道守活動に参加してもらうようになりました。私たちも自分たちの道は自分たちで守るんだっていう、気持ちを持って肩肘をはらずに、いま何ができるんだろう、いま自分たちにできることをコツコツしながら、それを見てみんながどう感じるか分からないんだけど、そういう姿を見て、みんなが道を大切にしないといけないという輪が広がっていったらいいかなとそういう思いで活動しています。



(山田氏)

福岡は北九州、福岡市、県南の3つに分かれておりますけれども、私は県南地域の道守柳川から参りました。ちょうど道守九州会議ができました時、8年前になりますけれども、同じ年の8月に柳川で道守活動をスタートしました。その時、柳川市の行政のほうで協力的で、行政が抱えておりますグループに声をかけて頂いて、最初にやりましたのは柳川の観光地です。ちょうど北原白秋の命日ということがありまして、柳川では昨日から明日まで白秋祭というのをやっております。そういう観光イベントがある前にお越しいただく観光客の方に綺麗な柳川の町をということで、清掃から始めたらどうかと思ひまして、始めました。年2~3回イベントの間に清掃を続けまして、最初は210名から今は8年目になりまして、つい先日やりましたけれども600名ぐらいの方にご協力頂いております。道守は8年も立つとだいぶ皆さんも知って頂いて、良くなったなと思っていた矢先な

んですけども、先日の会議を行いますというご案内を出したところ、草取りの会議ねと言われたんですけど。草取りの会議、本当は道守の会議と言って欲しかったなと思ったのがまず一つ、柳川の道守が国土交通大臣賞を先日頂きました。新聞で取り上げて頂いて、そしたら知っている方たちから、あんたたちお金もらいようとねというのが非常に気になりました。いま、改めてもう一度、道守活動とはどういうことかなと考えさせられました。最初の草取りの件ですけども、楽しくやっていかないといけないかなと。今まで私たちは清掃活動だけやってきたんですけども、これからは道守というのは清掃だけではなく、近くの道守に参加すれば交流がある、花いっぱい運動がある、あるいは道歩きがある。そういった色々な楽しいことがあります。そして、また集まって茶話会などして色々なお話をすることが出来る。そういったことができたらいいなと思ったことと、そして、ボランティアですよ、と無理をしないで、できることをできる人がやりましょうというのが、常日頃からやっばり、頭において活動をしていきたいなと思っています。こういう形で活動を続けていまして、できるだけたくさんの方が参加して頂くと、それだけ若い人の目にも付けるんじゃないかなと。そしたら口で言うよりも、実際私たちが清掃してる姿、道守活動をしている姿を、若い人たちに見て頂いて、その人たちがゴミを捨てなくなる、逆に拾うようになる、そして私たちが一緒になって町を綺麗にしていくことができれば、将来の道づくりにつながるかなと思っています。まだまだ、よちよち歩きですけど、私たちも地道に道守活動を続けていければなと思っています。



(川上氏)

各県から色々な活動の話がありました。それぞれの県に色々な道というのがありますが、風光明媚な道もありますし、歴史街道もあります。そういった道をどう育てていくかというのは色々な活動しながら楽しむというのもあるのですが、やっぱり来られた方に良い印象を持って頂きたいという風な思いが当然ある訳で、色々なそれぞれの県で取り組まれているのも、最終的には郷土を愛しているからとか郷土が好きだからこういうことをやっているんだと思うんですよね。そういうご紹介も色々ありました。それでは各県の代表ということでご紹介が有りましたが、これが全て各県全ての取り組みじゃないんですよね。色々な取り組みをされているかと思いますが、この際、会場から私も話したい、紹介したいという方がいらっしゃいましたらご紹介頂ければありがたいと思うのですが。

(会場参加者)

今日は皆様の県を聞かせて頂いて、大変参考になりました。私たち長崎会議ではNPO長崎会議というのを立ち上げて活動しております。苗を提供して頂くことが少なくなりまして、なんとか自分たちの力で苗を確保できないかどうかということで、まず、提供してくださる企業の方を使いまして、その方々から苗ではなく、種を買って頂いて、それを学校の子供たちに苗を育ててもらいまして、それをボランティアの方々に植えるというシステムの構築ということで、今年社会実験をさせて頂きました。また、長崎に「おくんち」という大きな祭りがあるんですけど、その時、各地から観光客の方たちに来て頂くんですが、そのときメインであります諏訪神社の前の道にですね、花を植えて、観光で来てくださる方々のおもてなしということで今回活動させて頂きました。その中で、やはり植えたは良いんですが、花に水をかけて、その花を元気に育てるというのがちょっと難しいかなと思いましたが、各県の方々、そのあたりどのように活動していらっしゃるのかなというのを伺いたいのと、もうひとつ、NPOの活動になって、苗の提供というのをやっております。なかなか行政の方から苗が頂けないということになったら、私たちが花を提供させて頂くという、そういう、コーディネーター的なことをやっております。

(新名氏)

水やりというか、管理は永遠の課題でして、従来は行政が花を植え、行政が植えたから行政が管理する、地元は手を出してはいけないと思っています。それは当然な話だなと思っています。それを打破するために、植えることを地元の人にしてもらい、育ててもらい。そして、花を咲かせてもらう。そう感じています。宮崎には宮崎公園協会という一般社団法人があり、そこで種をまいて、管理、育てるのは公園協会がやり、それに参加したことによって苗を提供してもらおうと。そういったことも実験的にやってみました。やはり植えることをしないと水をやるとか育てることにつながらないので、そこから始めることから意識を植え付けるということが必要だと思います。

(会場参加者)

宮崎会議の県北ブロックの世話人しています。県北のほうではイノシシの被害が大変多いものですから、その間にですね、さるすべりとか、さくらとか植えて景觀を良くしようという動きはしておりましたけれども、花を植えることも、木を植えるということもすっかり辞めました。何をしてもダメだということでですね、それから考えたんですけど、考えて行くうちにいや、そういった無駄なことはしない方がいいと。それよりか、一つの言葉を頂いたんですね。あんたのどこ行くと息が苦しくなるといわれたんですよ。息が苦しくなるということがどういうことかということ、326号線が開通してですね、本当に喜びました。開通した時は日の丸手旗振って、とっても喜んだんです。それから活動範囲も広がりますし、生活も楽になりました。それから16~17年間になりますかね。だんだん、法面に木が生え、草が生え、だんだん山が迫ってきたんです。近づいてきた。私たちはそれが普通だと思っていたんですが、よそから来た人たちにすると、何と狭っ苦しいとこに住んでいるんだと、息が苦しくなったと聞いたハタっと思ったんです。だったら植えることをやめて、切ってしまおうと。そういった切って刈ってすっきりした方が良いと。開通した時のあの素晴らしい道路が、また蘇るんじゃないかと、声かけをして、道の日に草刈り、木を刈っていこうと。道路を広くしようということで、チェーンソー持ってきたり、草刈り機を持ってきたりして切ってきました。燃料それが一番大切ですよ。自分で燃料まで持ってきて切る者もおりません。ですから、土木事務所に駆け込んで燃料ください。ゴミ拾いするから袋も下さい。て掛け合いましたら。いっぱい下さいました。で、そこで20数人と切ったくりました。水の駅というのを作って頂いたんですけど、地元の人たちもこういった素晴らしいところがあるとは知らなかった。え、こういうところが有ったんだろうかと。その一日でもう、すっきりして綺麗になりました。これから私たちは、植えたり植栽したりということを私たちは一切やめました。そういったことは家の中でやればいい。庭を綺麗にすればいい。それがおせっかいということにならないだろうし、道を326号を大切に守っていききたいということで、年に春と秋、もう切ったくることにしました。おかげでものすごく気持ちがいいです。これからもそういった仲間たちとこの326号を守っていこうと特別隊というのを作りました。これからがんばっていききたいと思います。それからこういった道守っていうのは、道守の活動をして上で、道守の活字っていうのは浸透していかないじゃないですか、活動は皆さんしていらっしやいますよね。道路清掃したりとかボランティア活動とかしてらっしやいますけども、それが道守参加といっても、浸透してない、じゃあ、浸透するにはどうしたらいいかと言いますと、地方紙を夕刊でかもしれませんけれども宣伝かもしれませんが、地方紙をじゃあちよっと活用しようかと、まず、市の広報に道守会議のことを役場職員にちよっと載せてもらいました。やっぱり反応が有りました。じゃあ、この反応をもっと広げて行くには、夕刊に活用しようかということで、読者の欄とか地域リポーターとか色々な面があるんですね。それを利用して、その道守会議っていう名前を常に見て頂くような、そういった活動、文章を送っていけばいいんですから、私はそれを利用して行こうと県北の方ではがんばっています。いま、一回は載りました。国土交通省さんからも載せて頂きました。私も読者の欄にちよっと500字以内だったですけれども700字くらい書いて送りました。もうすぐ載ると思います。そういったことで宣伝していききたいと思います。

(川上氏)

それぞれの地域で、道とのかかわりというか道路の空間は違いますよね。それぞれの地域の思いとか知恵を出し合うというご紹介であったと思います。

(宮田氏)

今、道守会議は名が浸透されていないとありましたが、長崎は非常に浸透してきました。100%ではないですよ。例えば、やっぱり道守、我々だけでなく、どうやって余所に連携していくか。例えば、長崎大学は道守という工学部が作ったんですね。技術的な判断をしている。地域でも広がってきている。ただし、私が思うのは自分たちだけでやったってしょうがない。要するに、お客さんとか通る人たちにもものを言わせるような。なにも植えたりするだけでない。そういう面は非常に、林野行政遅れていますから。そういうものに対する提言もします。今日の話題は新しい時代の道守ということですから、今まで以上に創意工夫をどうやっていこうか。また、長崎もずっと言っていました、女性が非常にリードしている。NPOも去年作りました。理事長ががんばっている。非常に、交流の場になっている。それともう一つ、念のためにスクールで管理する方法。これちょっと国交省の作る側をお願いしたいのですが、作る時にこういう会をやはり、アメリカの場合は高速道路設計などの場合に説明会を10回ぐらいやるんですね。そして住民は意見をやるんですね。こういう図面だよこういう。そうすると、質問者がずらっと並ぶんですね。私はそういうシステムを

新しい時代の新しい道の作り方、作ったものを守るというじゃなく、作る時から住民を参加させるシステムと。実はそういうことを横尾市長にもお願いしたいのですが。そういう行政システムの手法をもっと広く市民を使う、そうしないと今後ダメだと思うのですよ。金はないは、行政のみなさん知恵はあるんですから、その知恵をどんどん出してもらえれば、お金はいりません。自分たちでやればいいんですから。金があるときはいりますけれども、いらん時はいらんのです。だから、そういう面では私はあり方というのは、今、守るんじゃなく、作る方から市民が入っていく手法を考えたいと。

(横尾市長)

日本の議会というのは全然作りが違うんですね。今日ここが、北米の議場だとしたら、こんな感じになっているんですよ。前が議員さんたち。大体どんなに多くても10人以内ですよ。これくらいで数が並ばれて議会が、こちらが公聴会のようになっておいて、市民の方がおられる。ネットでご覧になったら分かるのですが、大体金曜日位に議題がでてるんです。火曜日から水曜日に公聴会があるんです。だいたい月に2回くらい。事前登録があったと思いますが、順番にマイクがあって、順番に2時間くらい、意見を言うことができます。それを議会の皆さんも聞いて、それを参考にしながらどうするかという議論になっていきます。そういう、新しい議会のあり方とか地方自治のあり方を考えた方がいいよと、私、分権会議の委員だったんですけど、申し上げました。そのあと、地方自治の検討会議の委員もしましたけれども、そういう議論もしました。ご指摘のようなことが、今後、色々な意味で議論になると思います。ただ、してくださいというだけではなくて、作ってもらったらあとは僕らが管理するよとか、作るときは少し協力をしたいよとか、そういう共同ということをしていくと、より良い地方自治、より良い地方の公共物の管理、より良い地方の町づくりになっていくと思いますので、今後、そういう機会が有りましたら考えて頂いたら良いんじゃないかなと思います。貴重なご意見ありがとうございます。

(川上氏)

議会の有り様とか、合意形成のあり方というのが有りましたけれども、皆さんが言われているとおり継続しないといけませんから、どちらかといいますと平均年齢が高いですよ。唯一若い日隈さんね。是非、今お話聞かれて、みんな熱意が一生懸命あると思うのですが、道を大事にしたいと。学生から見て、感想なりこうすればもう少し大学生も参加できるとか、気付いた点をちょっとお話頂けると。

(日隈氏)

僕たちの発想にも繋がるんですけど、商店街と自分たちだけでも不十分だし、行政と自分たちだけでも、不十分なんですよ。団体と行政と商店街のお店の方々が互いに意見を出し合える場所をどこかで作ってもらったら、もっと大学生なりの意見を入れられるし、行政の方の意見とか、お店の方々他の意見とうのも交換できて、それによってより良くなっていくのではないかと。イメージなんですけれど、単体で行政は行政でやっている、街中は街中でやっている、団体は団体でやっているというようなことがあると思うので、そこを繋げる何かがあれば僕は思います。

(三原氏)

みなさん意見が白熱しているんですけど、今、日隈さんが言われたことがすごく今回のテーマに沿っていて、もっと行政だけでもダメ、私たち道守だけでもダメ、一般市民も巻き込んで、学生も巻き込んでと言うことで、とてもいい意見が出たと思います。

(山田氏)

今の意見と同じなんですけれど、柳川の場合は行政と非常にコミュニケーションをうまくやってですね、その時にやっぱり、私たちは行政のこれはこれには使えないとか、そういった一般市民では分からないので、もしかしたらときどき迷惑をかけているのではないかなとか、そういう気を使うことがあるんですけど、そう意味では率直に行政と私たちを巻き込んで、これはできないとかですね、じゃあ、もっと上に持って行くには何を私たちはしたらいいんじゃないんでしょうかと、そういう話し合いが気さくにできればいいんじゃないかと思います。それと、ひとつ、柳川市役所さんの場合は道守が始まってから、市の方も、毎月、顔をずっと変えながら一緒に清掃を始めてくださっているの、そういう意味で非常に嬉しいです。行政と一般市民というのは、お互いに町づくりに欠かせないんじゃないかと付け加えさせていただきます。

(岡田氏)

八代の場合は熊本高専の八代キャンパスがありまして、今度、八代駅前にランチを作ってくださいまして、ただし、学生さんが作っても、なかなか言われる通り商店街の方たちコミュニケーションがとりにくいということが有りますので、私たちNPO法人がそのランチを使わせて頂いて、そこを市民の地域づくり場所にやっております。それで、非常にやはり、高齢者の方ですね、ちょっとしたイベント、朝市とかそういうのを仕掛けながら、学生さんを巻き込んで、地域の方たちを巻き込むようになった。熊本県は地域づくり団体に入っているんですが、県の中で地域づくり団体のコーディネーター研修とかで、そういう人たちを巻き込むのも一つの方法じゃないかなと。それと行政も来られていますので、行政も市民も、今から始めるという活動団体とか、今からすでに始めている団体とか、うまくコーディネートするような、そういう行政でもない、一市民でもない、我々NPO法人と提携されたいかがでしようか。

(新名氏)

今回の道守九州通信の7頁に私たち宮崎が紹介されているのですが、唯一、道守活動をしている写真です。私は本当にいい写真だなと思います。私たち道守活動の原動力は人とのつながりが原動力になっているのかなと思っています。そして、参加されている人たちは、ただ、清掃とかそういうことだけやっているだけではなくて、他の活動もやっておられる。私どもは道を綺麗にして、じゃあ、他に何をするかといえば、道を使った音楽祭をやっている。新しい形での文化活動と道守というか道を清掃したり、道守におられる方のなかで、いわゆる、人と人とのつながりが化学変化を起こしている。大学側自体も、学生さんが社会とつながっているという機会が無いということで、サテライト宮崎でも言われていますけれども、それを求めていらっしゃる訳ですね。そういう場を我々も積極的に提供する。そうしたら若い人たちが一人でも二人でも来た時に、大きな化学変化を起こすのかなと思っています。そして本当は次の活動のエネルギーになっていくのかなと、それが未来につながるかなと思っています。

(宮田氏)

市長さんがいらっしゃいますけれども、自ら進んでゴミを拾っている市長さんは、何人くらい世間でいらっしゃいますかね。やはりトップが自ら動かないといけないと思います。我々市民は動いているんです。市民も目覚めています。自分の町は自分で作るんだと。頼らない。他の市長にお会いになって頂きたいのですが、トップが動かない。それが日本は欠けているのだと思います。道守でやっているからゴミ拾いをやる。それではいかん。だから、今日の話で多久市長は本当、我々が表彰したいという。なんかそういう、モデル市長とモデルの地域をどんどん増やしていくという、これが町を綺麗にするという。企業もトップが動かないから色々なことが隠れてきた。

(横尾市長)

議会も協力してくださる人がいらっしゃるんですけれども、前の正副議長と一緒にゴミ拾ってですね。心ある人もいますのでよろしくお願いします。

(川上氏)

第二ステージに入ってくる上で、やはり関係者を増やさないといけない。今、一生懸命やられていう方はもちろんですけど、次の世代、今日、たまたま佐賀大学の日隈さんに参加頂きましたけれども、広がりがありますよね。これからは老若男女共同参加、もっと言えば、「老・中・若」と言いますけれども、幅広い三世代共同参画で広がりを見せないといけないというのが一点。それとその関係者をつなぐ、今日のつながりの道というのがありますが、それをどうつなぐか。一つは今日話題がありました、コーディネーターがありますね。そういう、つなぎ屋さんがいる。それと、先ほどあったトップの力量が大事だとそういう話もあります。そういう、関係者をつなぐ役割の人をどうやって育てるか。場合によっては道守会議によってコーディネーターの資格を表彰してやっていったらどうか感じもしました。それから関係者をつなぐ時に、サテライトを持ったりとか、人だけじゃなくて場の提供もあります。その時に内容も、花を植えるとかだけでなく計画論の話もありますし、道づくりそのものの話もあります。最後に現実的な話を一つ付け加えると、お金がないとなかなか回らないと。志、夢を片手に持ったとしたら、もう一つの片手にはそろばんを持って具体的にそういう機能するようなですね、継続的な仕組みというのが大事だと思います。この辺は色々団体でノウハウがあるのでしょうかから、これから交流集会がありますので、色々な知恵をお互い情報を交換しながらいい形で第二ステージの道守会議が進むことを祈念しまして、終わらせて頂きたいと思います。